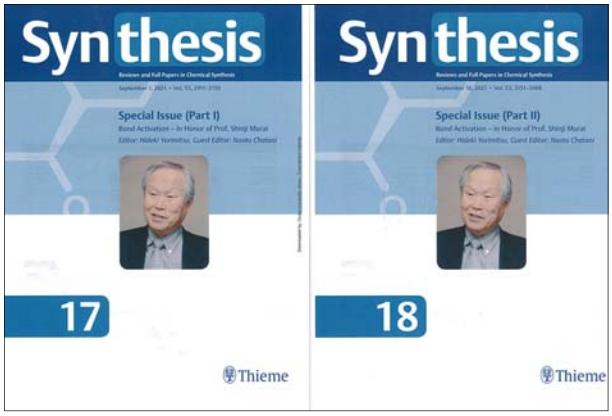
■ 歴代プログラムディレクターからのメッセージ

元素戦略プロジェクト
<研究拠点形成型>
初代PD（2012-2015）

村井 眞二　Shinji Murai
奈良先端科学技術大学院大学 特任教授

元素戦略（拠点形成型）は、文科省担当部署とＪＳＴ担当部署の緊密な連携のもとスタートしたものであり、いくつかの際立った特長を持つ。すなわち、複数の研究目標のシャープさ、グループ横断的な研究手法とグループ内組織の共通性、内外との強い連携、加えて若い研究者の養成などである。大きな成果と波及効果が期待されるプロジェクトであり、現在成功裏に展開されつつある。元素戦略は、わが国に端を発し今や世界を先導するコンセプトである。今後も、元素戦略としての広い発展とともに、物質系研究開発への大きな寄与、さらには、「経済安全保障」ばかりでなく「地球安全保障」の基盤となることを期待したい。



氏の功績に敬意を表する『Synthesis』特別号2冊（2021）

元素戦略プロジェクト
<研究拠点形成型>
初代PD（2012-2017）

澤岡　昭　Akira Sawaoka
大同大学　名誉学長

元PDのつぶやき

今年度で終了する研究拠点形成型元素戦略プロジェクトの前に産官学連携型16課題が実施され、PDを7年間務めた。1課題5年間のプロジェクトであり、2年間重複して現在の拠点形成型が始まり、PDを6年間務めた。このプログラム立ち上げの会合で、一人の研究代表者から「プログラム終了時にあなたは80歳を越えている、最後まで続けるつもりか？」とのきつい発言があり、「折り返し点の5年間でバトンタッチしたいと答えた。私と同年齢の村井先生は4年でPDを辞退され、私は6年で玉尾PDと交代した。79歳であった。

1999年に名古屋の私立大学長に就任するとき、研究をやめて大学経営に専念する覚悟であったが、徐々に元素戦略プロジェクトに引き込まれ、PDは悪役に徹しなければ務まらない仕事であることを痛感した。元素戦略プロジェクトは文科省の委託業務である。特に苦労したのは、科研費補助金と受託研究の区別が付かない研究者とのやりとりであった。文科省担当者は2～3年で交代するので、クールでドライなPDの存在はプロジェクト遂行上不可欠である。

学長職と元素戦略PDの仕事をほぼ同時期に終えた頃、路上でばったりと会った元学園理事長から、顔つきが良くなったと褒められた。二つの悪役から解放されたからだと思った。11年間、二足の草鞋の仕事ができたのは中山智弘PO（プログラムオフィサー）の支えがあったからです。感謝します。